

大事な一つぶの命

高屋西小学校 五年 松田 崇志

「これをあげよう。育ててみたら育つかもよ。と言われ、わたされたのは二十つぶほどのお米だった。」

ぼく達、東広島市立高屋西小学校は、毎年五年生になると「スマイルプロジェクト」というお米を育てる活動をしている。地いきの向原さんの田んぼをかりて、田植えや稲刈りを体験し米作りの事を学ぶ総合的な学習の時

間の授業だ。この授業の最初に、ぼくは向原さんと山田さんにお米をもらった。そのお米は、ぼくの家にある白いお米とちがって茶色いもみがかついていた。精米する前のお米と似ていた。

（本当にこんな小さなつぶから育つのかなあ。）
よし、育ててみよう。
と、受け取った時に思った。

「ただいま、お米もらったんよ。」
と母に言い、教えてもらった通りにお米を水

にひたした。

それから二日後。

「おおー、芽が出てのびている！」

と、歓声を上げると、

「本当に育つのだね、このまま大きくしてみよう。」

と母が言いこのまま育てる事にした。それからも毎日成長していき、田植えができるほどのなえに成長した。ちょうどその時、学校でも田植えをする時期だった。

向原さんの田んぼは、バスケットボールコート一面程の広さで、四クラスで分担してなえを植えた。田んぼの地面はかたいのかと思っていたが田んぼに足を入れるとすぐくやわらかく動きづらかった。ぼくは、七乗ぐらいなえを植えたけど、地面にあまりさしていかかったなえは、たおれたりしていたので、ごく田植えはむずかしかった。また、ぼくは二十つほどの米からなえを育てたが、向原さんは五年生約百二十人分のなえを用意してく

ださっていた。一体何つぶのお米から育ててくれたのだろうと思ひ感謝の気持ちでいっぱいだ。この気持ちは、自分で育てなければわいてこなかつただろう。そして、ぼくが育てたなえも田植えをしてあげたいと思つた。

ぼくのおじいちゃんの家で野菜を育てている。おじいちゃんにぼくが育てているなえの事を相談すると、

「大きいプランターがあるけん、ここで育てようや。」

と言つてくれた。そして、おじいちゃんといふしょに大きな三つのプランターに植え変えた。おじいちゃんの家は近くにあり、行く度になえは大きく育つていた。向原さんの田んぼに水がない時は、ぼくとおじいちゃんの田んぼにも、水ぬきをした。

小さな一つぶから育つたなえは、今では六十センチメートルほどの大きさになっている。これからも、この大事な一つの命を見守り、感謝して一つぶ一つぶ大事にして食べていく。